

## 2017 年度学会賞審査報告

### 審査対象図書

著者 遠藤英樹  
タイトル 『ツーリズム・モビリティーズ—観光と移動の社会理論—』  
出版社 ミネルヴァ書房  
出版年月 2017 年 3 月

本書は、現代社会における観光というモビリティ（ツーリズム・モビリティ）に着目し、「ツーリズム・モビリティの社会理論」の展開を目的としており、更には人文・社会科学の刷新へ寄与することを目指している。特に、本書は観光学を「静的・定常的なディシプリン」ではなく「動的・生成的ディシプリン」として確立させる必要があると主張している。

本書は8つの章と1つの補論から構成されており、それぞれの章は第Ⅰ～第Ⅲ部の3つに分類されている。まず第Ⅰ部「ツーリズム・モビリティと文化」では、ツーリズム・モビリティが文化、特にポピュラーカルチャーにどのような痕跡を残しているのかが考察されている。また、東京ディズニーリゾートを例に、グローバルなモバイル社会を理解することの複雑さ、そして理解するための方法を論じている。第Ⅱ部「ツーリズム・モビリティと地域アイデンティティとダークネス」では、現代社会においてツーリズム・モビリティがいかに地域のアイデンティティを形成するのか、また、ダークネスと結びつくのかを、よさこい祭りや近年注目を集めるようになったダークツーリズムを例に論じられている。第Ⅲ部「ツーリズム・モビリティと再帰性」では、観光文化の再帰性に関する議論が展開されている。まず、旅はかつて現実感覚（リアリティ）やアイデンティティにアクセスするためのメディアとして機能していたこと、しかし、2000年代に入りその機能が変化していったことが述べられている。また、シンガポールを例に、モビリティの進化により地域は絶えず生成され続けるものとなっており、地域研究には今まで以上に大きな刷新が求められていることを論じている。そして終章では、快楽をめぐる「外部の唯物論」を基軸とし、観光社会学の新たな可能性について模索している。

本書は、現代のグローバルでありモバイルな社会における観光というモビリティに焦点を当て、観光学を「動的・生成的」なディシプリンとして確立するために、様々な事例を提示しながら、また基礎的な理論の説明を怠ることなく、丁寧な議論を展開している。須藤(2018)が指摘しているように、「動的・生成的」であることと「不確定」「不確実」「不安定」であることは同義であることの矛盾について、本書ではあまり議論されておらず、今後より深く、そして発展した議論が期待される。しかし、著者が目指しているように、本書が「ツーリズム・モビリティの社会理論」の展開、また観光社会学研究の発展に貢献していることは明らかであると考えられる。また、観光研究や関連する研究領域の研究者だけではなく、観光学を学ぶ学部生・大学院生にとっても、観光社会学の視点から現代社会を考察する上で、理論的な枠組みを学ぶことの出来る大変重要な本となることが期待される。したがって、本書は本学会の著作賞に該当すると考える。

## 記

### 目次

- 序 章 人文・社会科学における「観光論的転回」—生成的なディシプリンへの呼びかけ
- 第Ⅰ部 ツーリズム・モビリティと文化
  - 第1章 モビリティ時代におけるポピュラーカルチャーと観光の相互接続—観光的磁場に惹かれるポピュラーカルチャー
  - 第2章 東京ディズニーリゾートの想像力—モバイルな現代社会のあり方を映し出す場所
- 第Ⅱ部 ツーリズム・モビリティと地域アイデンティティとダークネス
  - 第3章 観光における「伝統の転移」—「合わせ鏡」に映る鏡像としての地域アイデンティティ
  - 第4章 社会的に構築される「ダークネス」—モバイルな世界において抑圧されたものの回帰としてのツーリズム・モビリティ
- 第Ⅲ部 ツーリズム・モビリティと再帰性
  - 第5章 「虚構の時代の果て」における「聖なる天蓋」—恋愛と旅の機能的等価性
  - 第6章 グローバル時代の新たな地域研究—シンガポールを事例とした考察
  - 第Ⅲ部補論 「再帰性」のメディア—近代を駆動させるドライブとしての観光
- 終 章 モバイル資本主義を超える「遊び」=「戯れ」の可能性—観光の快楽をめぐる「外部の唯物論」

以上